

無着成恭編『山びこ学校』の成立とその反響

— 戦後作文・綴り方教育成立史研究 —

菅原 稔

わが国における戦後の作文・綴り方教育は、国分一太郎著『新しい綴り方教室』（1951〈昭和26〉年2月28日 日本評論社）と、無着成恭編『山びこ学校』（1951〈昭和26〉年3月5日 青銅社）の刊行を契機として、復興・興隆したとされている。

本稿では、このような動きを担った『山びこ学校』を取り上げ、その成立の背景、契機となった文集「きかんしゃ」のありようを明らかにするとともに、わが国の戦後作文・綴り方教育史における位置や意義、果たした役割や評価等について考察を行う。

Keywords：戦後，作文・綴り方，生活綴り方，無着成恭，『山びこ学校』

1. はじめに

わが国における戦後の国語科教育，わけても作文・綴り方教育は，一方で，戦前の豊かな理論的・実践的成果の集積を継承し，また一方で，戦後の新たな理論的・実践的なあり方を模索し，独自の形で生成・発展して行った。

このような戦後の作文・綴り方教育の歴史の中で，『山びこ学校』（無着成恭編 1951〈昭和26〉年3月5日 青銅社）の占める位置は大きい。

同書は，山形県南村山郡〈現在の山形県上山市〉の山元中学校で刊行された文集「きかんしゃ」（1949〈昭和24〉年7月から1951〈昭和26〉年3月までの間に刊行され，誌齢14号を数える。）に掲載された生徒の文章を集めた「作品集」として刊行されたものである。

※・『山びこ学校』は現在までに下の4種が刊行されている。

- ①『山びこ学校』
1951〈昭和26〉年3月5日 青銅社
- ②『新版定本 山びこ学校』
1956〈昭和31〉年3月15日 百合出版
- ③『山びこ学校 付「吹雪の中に」抄』
1969〈昭和44〉年9月30日 角川書店
- ④『山びこ学校』

1995〈平成7〉年7月17日 岩波書店

これらのうち③と④は，②を底本としていることがうかがえる。③には『ふぶきの中に 山びこ学校の詩集』（1952〈昭和27〉年3月15日 新潮社）から12編の詩が掲載されている。また，①と②は，生徒の文章・詩が3カ所で前後していること，2つの文章の表題が「僕の家」と「ぼくの家」，「学校はどのくらい金がかかるか」と「学校はどのくらい金がかかるものか」と違っていること等の他に差異は見られない。また，生徒の文章（37編），詩（16編）の配列（掲載の順序）に特段の編集意識をうかがうことはできない。

この『山びこ学校』の背後には，指導者・無着成恭（1927〈昭和2〉年～）の文集「きかんしゃ」を中心とした作文・綴り方教育実践があったことがうかがえるが，その刊行当初から「『山びこ学校』はわが綴り方運動三十年に大きな画期をもたらした」（注1），「『山びこ学校』が日本中の山々に，村々に，大きなこだまを呼び起こし，それと前後して生活綴り方の火の手はりょう原の火のように燃えひろがっていった。」（注2）と評価され，ベストセラーとなるとともに劇化・映画化される等，その反響は教育界だけではなく，広く日本全国に及んだ。

岡山大学大学院教育学研究科 社会・言語教育学系 700-8530 岡山市津島中3-1-1

The Formation and the Responses of "Yamabiko - Gakko" by Seikyo MUTYAKU

Minoru SUGAHARA

Japanese Language Education, Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1

Tsushima-naka, Okayama, 700-8530

このような刊行当初の評価に加え、現在では、「『山びこ学校』は、戦後の生活綴り方運動を飛躍的に発展させる原動力となった」（注3）「『山びこ学校』は、新教育に模索していた良心的な教師に大きな励ましを与えた。そして、戦後生活綴り方の復興に大きな役割を果たした。」（注4）と、戦後の作文・綴り方教育の復興・興隆に大きなきっかけと影響を与えたとする、積極的な評価、歴史的な位置づけが定着したものとなっている。

本稿では、このように評価され位置づけられる『山びこ学校』の成立の背景を明らかにするとともに、その母胎となった文集「きかんしゃ」を中心とした指導・実践がどのようなものであったのか、その内容・方法、および、意義・特質を考察する。さらに、『山びこ学校』に対する評価・反響の有り様とその内実とを整理・考察し、わが国の戦後作文・綴り方教育史における『山びこ学校』の位置や意義、果たした役割等を明らかにしたいと考える。

2. 『山びこ学校』の成立の背景

『山びこ学校』の指導者・無着成恭は、山形師範学校卒業（1948〈昭和23〉年3月）後、前出の山元中学校に赴任する。そこで「師範学校を卒業したばかりの私にあたえられた四十四人の子供のうち、自分の名前をまんぞくに書けないのが六人いました。」（注5）という生徒に「地図一枚もなく、理科の実験道具一かけらもなく、かやぶきの校舎で、教室は暗く、おまけに破れた障子から吹雪がびゅうびゅうはいつて来る教室」で、教科書にある「村には普通には小学校と中学校がある。この九年間は義務教育であるから、村で学校を建てて、村に住む子供たちをりっぱに教育するための施設がととのえられている。」（注6）と教えることの矛盾に直面する。様々に逡巡した後、無着成恭は、その矛盾と葛藤とを師範学校の先輩であり知己であった須藤克三に相談し、生活綴り方への道を示されたとのことである。国分一太郎によれば、「……須藤克三は、無着成恭に問われるままに、むかしの生活綴り方による教育の話などをし、いまの形式主義的でゴッコ遊びみたいな社会科の行き詰まりを打開する道は、生活綴り方の方法でひらけるかもしれないと強調した。生活綴り方の書かせ方等についても、こまかな暗示を与えた。無着はここではじめて、生活綴り方というしごとのあったこと、山形県にも村山俊太郎や国分一太郎らの実践の歴史があったことを知り、その方法のまっしぐらな開拓に、たったひとりでの道を歩みはじめた。」（注7）のである。

この国分一太郎の文章は、無着成恭自身の次のよ

うな記述ともほぼ一致する。

「女教師の記録」という本も、内容やその他が有名なことを知っていて買ったのではなくて、ふと目についたから、手にとってみた。そしたら三〇円だったので、そんなら捨てたって惜しくないやと思って買ったのだった。

その本を仙台からの帰りの汽車の中で感激して一気に読んでしまったのを、今でもありありと思い浮かべることができる。

九月にはいつてからのある日、須藤先生に、国分先生や村山俊太郎先生のこと、生活綴り方のこと、「教育生活」という雑誌のこと、などを聞いて、すっかりコウファンしてしまったのだった。（注8）

上の国分一太郎の文章および無着成恭自身の記述から、師範学校を卒業した無着成恭が、1948〈昭和23〉年当時の農村が置かれていた厳しい教育環境に直面し、その状況を打破し乗り越えるための方途を模索するうちに、偶然手にした『女教師の記録』（平野婦美子著 1940〈昭和15〉年4月13日 西村書店）を通して生活綴り方（運動）と出会う。そこに自らの直面する課題を解決する可能性を見出した無着成恭は、須藤克三に生活綴り方についての教を請い、自らの社会科の行くべき方向を発見するのである。無着成恭自身が「私はつづり方を知らなかった。昭和二十三年の三月に師範学校を卒業した私は『戦地の兵隊さんごくろうさん。』というイモン文を書いて育ったのだ。つづり方は、イモン文だとさえ思っていた。」（注9）と述べているところから、自身が、戦前に山形で興隆した生活綴り方教育を受け、その体験によって自らも作文・綴り方教育に取り組んだ——のではないことが分かる。また、「……かつての綴り方教師たちが書き残してくれたもので持っているのは、綴り方の世界 百田宗治、綴り生活（ママ）平野富美子、綴り読本 鈴木三重吉、綴り教室・前後 豊田正子、です。隣村の大沢君の持っているのは、調べる綴り方の実践と理論の工作（ママ）千葉春雄だけです。私はまだこの五冊しか読んでいません。」（注10）と述べているところから、戦前の作文・綴り方教育に関する文献の多くを読み、それらを手がかりとして自らの実践を開始した——のでもなかったことが分かる。生活記録・生活指導から出発する『女教師の記録』と出会い、戦前からの生活綴り方教師の一人であった須藤克三の導きによって、「生活を勉強するための、ほんものの社会科をするため」の指導を、「綴り方を利用」し「綴り方で勉強」することを目指して、作文・綴り方教育に取り組んだのである。

無着成恭は、山形師範学校卒業と同時に山元中学校に赴任し、1年生を担任する。この生徒たちが2年生になった(1949〔1924〕年)7月に文集「きかんしゃ」が創刊されている。

すでに取り上げたように、無着成恭が須藤克三から生活綴り方(教育)についての話を聞いたのは1948〔昭和23〕年9月とのことである。その直後から作文・綴り方教育を開始したとして、約10か月後に文集「きかんしゃ」の創刊第1号が創刊されたことになる。ただ、無着成恭が、なぜ、文集の刊行を始めたのか、その明確な理由は分からない。今は推測の域を出ないが、戦前からの生活綴り方教師であり戦前の同人誌である「綴り方行動」(注11)にも参加していた須藤克三から、戦前に刊行された何冊かの文集を見せられたこと、須藤克三を中心として集まっていた教師たちから、各自が刊行している文集を見せられたこと等によって、自らもその刊行を始めようとしたことが推測される。

3. 文集「きかんしゃ」の内容と特質

文集「きかんしゃ」全14号のうち、その典型的なものとして第2号(1950〔昭和25〕年1月1日刊 全61ページ)をあげることができる。それは、次のような理由による。

ア・優れた生徒の文章を掲載する顕彰のための文集、学級の生徒に自分達の手になる読み物を提供する学級の総合雑誌としての文集、掲載されている生徒の文章を用いて文章表現や描写の方法などを指導する学習の資料・練習帳としての文集……等、多様な意図・目的を持った編集形態が見られること。

イ・「社会科としての作文・綴り方指導」と「文章表現指導としての作文・綴り方指導」の両面を見ることのできる文集であること。

ウ・のち『山びこ学校』を代表する生徒の文章の一つとされる江口江一の「母の死と其の後」が掲載されている文集であること。

いま、上のようにとらえることのできる文集「きかんしゃ」第2号の目次・構成を取り出すと、それは、次のようになっている。

- きかんしゃのことは(巻頭言)・・・1
 1. 日記・・・2
 (無着成恭の「まえがき」)
 ・日記(1) 長橋アサエ
 ・日記(2) 門間きり子
 ・日記(3) 長橋アヤ子
 (以下、10名の生徒の「日記」10編略
 一引用者)

2. 葉書・・・20
 (無着成恭の「まえがき」)
 ・川合哲男君 江口俊一
 ・無着成恭先生 小笠原勉
 ・川合孝一様 川合貞義
 (以下、16名の生徒の葉書文16編略
 一引用者)
 (無着成恭の「あとがき」)
 3. 原稿用紙の使い方(無着成恭)・・・28
 4. 接続詞を自分のものにしよう・・・29
 (無着成恭の「まえがき」)
 ・河合貞義
 ・江口江一
 ・小笠原勉
 (以下、37名の生徒の短文37編略
 一引用者)
 (無着成恭の「あとがき」)
 5. 私たちと家・・・34
 (無着成恭の「まえがき」)
 ・母の死と其の後 江口江一
 ・すみ山 石井敏雄
 ・すんしょ 上野キクエ
 (以下、6名の生徒の文章6編略一引用者)
 (無着成恭の「総評」)
 6. 教室から：お父さん・お母さんに
 (無着成恭)・・・59
 7. 編集後記(無着成恭)・・・60
 8. 製本者のことば(江口江一)・・・61
 上の目次・構成のうち、「きかんしゃのことは(巻頭言)」と7の「編集後記」は無着成恭から読み手である生徒への文章、6の「教室から：お父さん・お母さんに」は保護者への文章、8の「製本者のことば」は、書き手を代表した生徒・江口江一から読み手の一人である保護者や他校の教師達への文章である。
 また、2の「葉書」は葉書を書いた経験を持たない生徒達に「『葉書はどうかくんだ。葉書のれんしゅうをさせろ』ということで、西洋紙を葉書と同じ大きさに切ってれんしゅうした」際に書いた短文を葉書の形のままだに採録したもの、3の「原稿用紙の使い方」は、上段に実際の原稿用紙に記入した文章例を示し、下段に「①一行目に題をかく。②二行目の下に、学年と名前をかく。」以下の注意事項を示したもの、4の「接続詞の使い方」は、「自分の考えを、自分の考えどおりわかってもらうため」に接続詞の使い方の学習をした後、「十の接続詞を使って短文を作ってもらった中から一人一句ずつえらんでのせた。」ものである。これらの、2の「葉書」、

3の「原稿用紙の使い方」、4の「接続詞の使い方」は、いずれも文章表現上の規則や約束ごと等、掲載されている文章を用いて文章表現や描写の方法などを指導する学習の資料・練習帳としての、「文章表現指導としての作文・綴り方指導」のためのページである。

これらの他の、1の「日記」と5の「私たちの家」の2つが、日記あるいは生活記録として書かれた文章を取り上げた、優れた生徒の文章を掲載する顕彰のための、また、学級の生徒に自分達の手になる読み物を提供する学級の総合雑誌としての、「社会科としての作文・綴り方指導」のためのページである。ここに収められた生徒の文章22編には、1の「日記」では生徒の文章の下に「脚注」の形で、5の「私たちの家」では、生徒の文章の末尾に「総評」の形で、いずれにも無着成恭の手になる詳細な評語が添えられている。

いま1の「日記」所収の江口久子の「日記(10)」に対する無着成恭の評語を取り出すと、それは、次のようなものである。

久子がこんなすばらしい日記をかいているとは思わなかった。久子！ ぐんぐんのびろ！

1 さかのさって一体どこだね。

2 誰が云ったんだい。

3 何故「のんきだなあ」と云ったのだろう。

4 どこに行くの？

5 このへんからあとはわらびがでていない様子がほんとにわかって面白い。

6 どのくらいとってきて帰ったのかかくとよかったと思わないかい。

7 首をちじめた久子のようすが目に見えるようだ。うまい！

8 ほんとうだねえ。どうだ。みんな！

(注12)

ここで取り上げられている江口久子の「日記(10)」の文章は、決して優れたものではない。5の「私たちと家」に収められている江口江一の文章「母の死と其の後」(この文集「きかんしゃ」第2号の刊行された2か月後、1950〈昭和25〉年11月に日教組主催の作文コンクールで文部大臣賞を受賞し、のち、『山びこ学校』が刊行されるきっかけとなった文章である。また同時に、『山びこ学校』を代表するものともされている。)と比較して大きな違いがあると言わざるを得ない。しかし、無着成恭は、この江口久子の文章を評語によって「評価」しようとはしてはいない。詳しく書かれてはいない、言い換えれば、不十分な表現や描写が随所に見られる文章に対して、冒頭に置かれた評語、および5、7、8の評

語で積極的に褒め肯定した上で、1、2、3、4、6の評語で不明な点を問いかけようとする。詳しく表現されていないから、不十分な描写だから、いけないのではない。書き手の意図が読み手に正確に伝わらないから、自分の思いや考えを意図通りに書き表し得ていないから、いわば「ありのままがありのままに表現・描写されていない」から、問いかけようとするのである。ここに無着成恭の、文集「きかんしゃ」を用いた指導の大きな特質を見出すことができる。

無着成恭は自らの実践を、「生活を勉強するための、ほんものの社会科をするため」の、「綴方を利用」し「綴方で勉強」するためのものと述べていた。その考え方は、この江口久子の文章に対する「評語」にも見出すことができる。すなわち、江口久子の「日記(10)」が質問をする必要のないほど詳しく表現され、十分に描写されていたとしても、それは作文・綴り方にかかわる表現力や描写力だけの問題ではない。あくまでも、その背後にある思考や認識のあり様、すなわち、生活に対する主体的な姿勢・積極的な生き方の問題としてとらえるのである。言い換えれば、何が、どう表現され描写されているか、それは、あくまでも方法であり手段である。目的は、その表現や描写を支える生き方、生活のありようなのである。そのように考えるからこそ、この「きかんしゃ」第2号における3の「原稿用紙の使い方」も4の「接続詞の使い方」も、国語科あるいは作文・綴り方教育ではなく、「生活を勉強するための、ほんものの社会科をするため」の指導と位置づけられ意識されたのである。

このような、作文・綴り方を目的としない作文・綴り方指導、すなわち、書くことを書くこととして意識しない作文・綴り方指導だからこそ、その指導の中から、優劣を越えた、豊かで個性的な文章が数多く生み出されたととらえることができる。

4. 『山びこ学校』に対する昭和20年代の評価と反響

日本作文の会の機関誌「作文と教育」(注5)で『山びこ学校』が初めて取り上げられたのは、その刊行の1か月後に発行された同誌第3号(1951〈昭和26〉年4月)所収の「良書すいせん」(注6)である。そこでは「『山びこ学校』はわが綴方運動三十年に大きな画期をもたらした」と述べた後、そのように評価する理由を、特定の「綴り方選手」によるものではなく学級の生徒全員の手になる文章を集めた作文集であること、「『文学主義』から全く自由な立場」に立つからこそ「却ってこれほど文学的に

も香り高いものが生まれた」ことの、二点としている。

次に「作文と教育」誌に『山びこ学校』が取り上げられたのは、同誌第6号（1952〈昭和27〉年2月）所収の、後藤彦十郎の手になる「映画『山びこ学校』ができた」である。ここでは、この映画によって「『山びこ学校』の教育を、精神的にも方法的にも、繰り返し味ってみる必要があるだろう」と肯定的に、また積極的に評価をした上で、次のような見解が加えられている。

ここで、われわれ「日本作文の会」同人のお互いが、とくに身にしみて考えたいことがある。それは各人の学級、学校の文集を、『山びこ学校』のように出版にならず映画にならないからといって絶対に軽視してはならない。と同時に『山びこ学校』だけを特別扱いにしないことである。（注13）

『山びこ学校』が映画化されることは、日本作文の会にとって、また、その会員である教師たちにとって、作文・綴り方が教育界のみならず、広く社会にその存在を認められ評価（認知）される大きな機会であったはずである。しかし、後藤彦十郎は、「映画『山びこ学校』ができた」ことに諸手をあげて喜ぶことよりも、それによって、作文・綴り方教育が結果主義・作品主義に陥ること、実践記録としての『山びこ学校』を特殊化・典型化すること等の危険性を指摘するのである。

『山びこ学校』の刊行によって、社会全体の目が教育、わけても作文・綴り方教育に向けられた。当時、この『山びこ学校』によって作文・綴り方への目を開かれた小・中学校の教師もいたに違いない。また、各地の教育現場で、“第二の『山びこ学校』”とでも言える実践が行なわれたことも、想像に難くない。しかし、作文・綴り方に取り組む教師たちの多くが依る「作文と教育」誌には、そのような実践記録は見られない。「作文と教育」誌上で『山びこ学校』に言及した論考は、ここで取り上げた「良書すいせん」「映画『山びこ学校』ができた」の他には、次に取り上げる第7号（1952〈昭和27〉年3月）所収の綿引まさの実践記録「町の子供は『山びこ』学校から何を学んだか」があるのみである。この3編の他には、『山びこ学校』を直接・間接に取り上げ言及した論考や実践記録は見られない。また、「作文と教育」誌に、『山びこ学校』を中心とした「特集」等も見られない。『山びこ学校』は、広く社会に知られ話題になることによって、いわゆる作文・綴り方の知名度や認知度を飛躍的にあげる上で大きな働きをした。しかし、“第二の『山びこ学校』”

とでも言えるような、新たな作文・綴り方教育の理論や実践を生み出したり、そのための指針を示したりするところまでには、至らなかったのである。

さて、「作文と教育」誌に取り上げられた三つ目の論考である第7号（1952〈昭和27〉年3月）所収の綿引まさの実践記録「町の子供は『山びこ』学校から何を学んだか」（注14）である。ここで綿引まさは「『山びこ学校』が日本中の山々に、村々に、大きなこだまを呼び起こし、それと前後して生活綴り方の火の手はりょう原の火のように燃えひろがっていった。」と述べた後、『山びこ学校』を、貧しさや生活環境の悪さを克服するための実践ととらえたのでは「東京の山の手では進学々々でアチーブに明け暮れ、下町の方では美空ひばりと野球に興じる子供達」との接点はなくなってしまう。そうではなく「子供はいろいろな生活の事実をありのままに出してくる。私はこれを積み重ねて行きながら、そこから正しい物の見方、生き方を学ばせたい」と考え、「生活を探究」して書いた児童の文章を学級の全員で読み合い話し合う活動を重ねて行く。それによって「きょう楽的な環境を批判し、のりこえていく眼、人の意見を批判的に聞く耳」を育てること、それこそが、東京の「子供達が山びこ学校から学んだもの」だとするのである。綿引まさのこのような考え方は、作文・綴り方、わけても生活綴り方が持つ「訴苦綴り方」「貧乏綴り方」になりがちな傾きを乗り越えるものであること、後に展開される小西健二郎の『学級革命』（注15）や戸田唯巳の『学級というなかま』（注16）等の実践記録に見られる、学級集団作りを目指した「書く⇔話し合う」指導につながるものであること等、高く評価することの出来る視点と言える。

教育科学研究会の機関誌「教育」の創刊第1号（1951〈昭和26〉年11月）は、二つの「特集」によって構成されている。一つは「日本教育の良心」、もう一つが「山びこ学校の総合検討」である。「教育」誌の創刊第1号の二つの特集の一つに『山びこ学校』があげられているところから、その刊行の母胎であった教育科学研究会においても、『山びこ学校』が中心的な大きな話題の一つになっていたことが分かる。

この「特集・山びこ学校の総合検討」は、次のような三つの柱によって構成されている。

〈報告〉綴り方は、すべての教師が書かせねばならないものなのではないか…無着成恭

〈解説〉ほくもそうだと思う、無着君…国分一太郎

〈座談会〉山びこ学校の問題点…無着成恭、滑川道夫、宗像誠也、他

冒頭の「〈報告〉綴方は、すべての教師が書かせねばならないものなのではないか」(注17)において、無着成恭は、生徒に作文・綴り方を書かせる意義・目的を、教師の側からは「教室の中の子どもを知るために、家の中の子どもを知るために、村の中の子どもを知るために、そして、日本という国の中の子どもの本当の姿を知るため」であり、生徒の側からは「自分が、今どんな生活の中で生きているのか。自分が生きている生活は、どんな仕組みの中にかたちづくられているものなのか。そして自分は、なにをすればよいのか。」を考えさせ知らせるためであるとする。無着成恭は『山びこ学校』巻末の「あとがき」において、自らの作文・綴り方教育を、国語科としてではなく「ほんものの社会科をするため」(注18)であると述べていた。しかし、ここに見る限り、生徒に作文・綴り方を書かせる目的を、教師の生徒理解と生徒の自己認識の深化・拡充に置いており、戦前からの作文・綴り方と軌を一にする立場にあったと理解することが出来る。

このような無着成恭の考え方に対して、国分一太郎は、後に続く「〈解説〉ほくもそうだと思う、無着君」において、次のように述べている。

つまり君は、君の生活を書かせる綴り方から、生きた世の中を具体的につかみとることのできるよろこびを、よりいっそう味わおうとしているのだ。それが「教育者的な社会勉強方法」の一つだと思っているのだ。これは、むかしの生活綴り方による教育を大切にされた青年教師たちのよろこびでもあった。(注19)

無着成恭は、『山びこ学校』の実践において、生徒の有様を現実の姿の中から学び、それを具体的なものとして育て指導しようとする。国分一太郎は、そのような無着成恭の姿勢に、戦前から続く作文・綴り方との共通点を見出し、その姿勢を高く評価したのである。

須藤克三編『山びこ学校から何を学ぶか—その人間教育の一般化のために—』(1951〈昭和26〉年11月20日 青銅社)は、『山びこ学校』の出版(1951〈昭和26〉年3月5日)の約8か月後に、同書に対する様々な批判、評論、書評等を集め、若干の書き下ろし論考を加えて刊行されたものである。

この『山びこ学校から何を学ぶか』の「第2・山びこ学校から何を学ぶか」と「第3・山びこ学校の反響」には、新聞や雑誌等に掲載された長短あわせて37編の文章が収められている。それらのほとんどは『山びこ学校』に対して好意的なものであるが、その典型として臼井吉見の次のような文章をあげる事が出来る。

しかも、ほくがこの本で最も感動したのは、無着先生受持のこれら四十三人の生徒たちは、いずれも現在の日本の根源的な問題を背負わされており、無着先生の指導とかれらの努力によってかれらは自分の生活のなかにこの問題を見出し、その解決にむかって勉強を続けている態度である。(注20)

ここで臼井吉見が感動の理由としてあげている事柄は、『山びこ学校』がなぜ大きな反響を呼び広く社会の中に受け入れられたのか、その理由と一致する。『山びこ学校』の中で取り上げられている問題や課題は、山形の一中学校のみの問題ではなかった。当時の日本人の多くは、敗戦という大きな衝撃から立ち直りきることが出来ず、経済的にも精神的にも、出口のない貧困や厳しさのただ中にいた。そのような人々の目に、『山びこ学校』の生徒たちの「根源的問題」に正面から立ち向かう姿、解決に取り組む姿勢が、大きな感動と励ましを与えるものと映ったのである。

また、宮原誠一は、その論考「教育への信頼」(注21)の中で、『山びこ学校』は「あきらかに生活綴り方の伝統の上に立ち、しかもそれからの見事な前進をしめしている。」とし、そう考える根拠を「第一に、『山びこ学校』の子どもたちは、生活の現実をえがきだすだけではなく、生活の現実の中から問題をつかみだしている。」「第二に、他教科と綴り方との結合という点で、『山びこ学校』の子どもたちは前進をしめしている。」と二つの視点からとらえている。ここで宮原誠一があげる二つの根拠・視点は、いずれも戦前の作文・綴り方、わけでも生活綴り方がその特質としていたものである。とくに、後者の「他教科と綴り方との結合」という課題は、戦前には「調べる綴り方」として取り組まれ、戦後には、後、「生活綴り方的教育方法」と呼びならわされるようになるものであった。このような、『山びこ学校』に掲載された生徒の文章の中に、戦前の作文・綴り方の伝統と戦後の作文・綴り方の発展の萌芽を読み取る宮原誠一の目を、鋭く的確なものと評価することが出来る。

5. 『山びこ学校』に対する昭和30年代以降の評価と反響

比較的早い時期から『山びこ学校』に取り組み、その評価や反響についての考察を進めた研究者の一人に船山謙次がいる。

船山謙次は、先の2の”に取り上げた、「教育」誌第1号掲載の特集「山びこ学校の総合検討」所収の「〈座談会〉山びこ学校の問題点」(注22)にお

いて、『山びこ学校』に対する否定的な評価や反響の整理を試みている。さらに、その後、須藤克三編『山びこ学から何を学ぶか』に『山びこ学校』批判の盲点」と題する論考（注23）を掲載し、さらに、「作文と教育」誌に13回にわたって連載した「戦後生活綴方教育論史」の中でも同様の考察を行なっている。

いま、この「戦後生活綴方教育史」の中で個条書きの形に整理された『山びこ学校』批判』を取り出すと、それは、次のようなものである。

1. 『山びこ学校』はイデオロギー教育である。
2. 『山びこ学校』の教育には明るさがみられない。
3. 『山びこ学校』の教育は、子どもの関心を経済問題に引きこんでいる経済主義の教育である。
4. 四十三人の子どもの作品には個性がとぼしく、ただひとりのひとの作のようにおもわれる。
5. 『山びこ学校』は作文教育の邪道におちいつている。
6. 『山びこ学校』は、ふんだんに方言が使用されているが、できるだけ標準語を使用させるべきである。
7. 『山びこ』の教育は、ムチャクチャカリキュラムで、計画性にとぼしい。
8. 『山びこ学校』の教育では社会についての正しい見方を指導している割に、自然についての科学的知識の教育はどうなっているのか。（注24）

『山びこ学校』が刊行された当初は、肯定的な評価や反響が余りにも大きかったために、このような否定的とも言える批判が取り上げられることはなかった。しかし、その強い個性と方向性のために、ここで船山謙次が整理しているような批判が徐々に取り上げられ話題になって行ったのである。

しかし、“第二の『山びこ学校』”の誕生を見ることはなかったものの、教育界だけではなく広く社会の目を作文・綴り方に向けたこと、作文・綴り方の持つ機能や意義を知らせ、戦後作文・綴り方教育が大きく花を開かせるきっかけを作ったこと、戦後の「仲間づくり・学級づくり・集団づくり」の上に働く作文・綴り方に気づかせたこと等、『山びこ学校』の占める位置や意義、果たした役割は大きい。

船山謙次が整理した『山びこ学校』批判の8つの視点は、ひとり『山びこ学校』に限らず、作文・綴り方が全体として内包する様々な課題や問題を指し示すものと、とらえることが出来よう。

6. おわりに

無着成恭の刊行した文集「きかんしゃ」は、わずか1年8か月の間に14号が刊行されており、当時の他の文集と比較して頻繁に刊行された文集といえることができる。また、ここにうかがえる実践は、熱意に満ちた周到なものであった。それだけに、そこから生み出された文章は、のち『山びこ学校』に集約され、高く評価されることにつながったのである。

また、『山びこ学校』を支えた作文・綴り方教育実践は、地域的・風土的特質と密接につながる形で展開されたものであり、容易に一般化・普遍化することのできるものではなかった。それだけに、“第二の『山びこ学校』”が生まれるほどの普遍化には至らなかった。しかし、その可能性・有効性を指し示し、作文・綴り方（教育実践）を広く社会に知らせたことの意義は大きい。そのような意味で、この『山びこ学校』が果たした役割と機能を高く評価することができる。

<注>

1. 「良書すいせん」「月刊作文研究」誌
1951〈昭和26〉年4月号 65ページ
2. 綿引まさ「町の子供は『山びこ学校』から何を学んだか」「作文と教育」誌
1952〈昭和27〉年3月号 19ページ
3. 大内善一『戦後作文教育史研究』（1984〈昭和59〉年6月10日 教育出版センター）176ページ
4. 日本作文の会『日本の子どもと生活綴方の50年』（2001〈平成13〉年8月1日 ノエル）42ページ
5. 無着成恭『教育ノート』
（1959〈昭和34〉年6月5日 凡書房）16ページ
6. 無着成恭『山びこ学校』（1956〈昭和31〉年3月15日 百合出版）251ページ
7. 「解説」国分一太郎『新版定本 山びこ学校』（1956〈昭和31〉年15日 百合出版）296ページ
8. 無着成恭『山びこ学校』がでる前のこと」「作文と教育」誌1959〈昭和34〉年1月号 35ページ
9. 無着成恭「私たちは何故つづり方をだいにするか」「つづりかた通信」第1号（1950〈昭和25〉年6月）4ページ
10. 無着成恭「生活綴方運動の遺産を守るために」「つづりかた通信」第1号「1950〈昭和25〉年6月」19ページ
11. 吉田瑞穂・入江道雄等によって刊行された同人誌。1934〈昭和9〉年7月から1940〈昭和15〉年7月までの間刊行され、誌齢16号を数える。

12. 文集「きかんしゃ」第2号 13ページ
13. 後藤彦十郎「映画『山びこ学校』ができた」
「作文と教育」誌 第6号（1952〈昭和27〉年2月）
30ページ
14. 綿引まさ「町の子供は『山びこ』学校から何を
学んだか」「作文と教育」誌 第7号（1952〈昭和27〉年3月）
19ページ～23ページ
15. 小西健二郎『学級革命』（1955〈昭和30〉年9
月20日 牧書店）
16. 戸田唯巳『学級というなま』（1956〈昭和31〉
年12月15日 牧書店）
17. 無着成恭「〈報告〉綴方はすべての教師がかか
せねばならないものなのではないか」
「教育」誌 第1号（1951〈昭和26〉年11月）
50ページ～59ページ
18. 無着成恭『山びこ学校』 252ページ
19. 国分一太郎「〈解説〉ほくもそうだと思う，無
着君」
「教育」誌 第1号（前出）60ページ～63ページ
20. 白井吉見「展望」（『山びこ学校から何を学ぶか』
〈1951〈昭和26〉年11月20日 青銅社〉）
94ページ～95ページ
21. 宮原誠一「教育への信頼」 同上 192ページ
22. 「〈座談会〉山びこ学校の問題点」
「教育」誌 第1号（前出）66ページ
23. 船山謙次「『山びこ学校』批判の盲点」『山びこ
学校から何を学ぶか』（前出）
133ページ～150ページ
24. 船山謙次「戦後生活綴方教育論史（18）」「作文
と教育」誌（1961〈昭和36〉年7月号）
84ページ～85ページ